

まずはトマスになろう

2020年5月27日

理事長 海野道郎

聖書：ヨハネによる福音書 第20章24節-29節

²⁴十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」²⁶さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁷それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。²⁹イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

今日の説教題を、私は、「まずはトマスになろう」としました。イエスはトマスに対して、トマス自身を乗り越えることを要求していますが、現代社会に生きる多くの人にとっては、「まずはトマスになる」ことが必要だ、と私は考えているからです。トマス——それは先ほど読んだ聖書に出てくる、イエスの弟子・トマスのことです。このテキストの直前には、「イエス、弟子たちに現れる」という小見出しが付いた話があります。イエスが十字架に架けられて殺された後、イエスの弟子たちは、イエスを殺したユダヤ人を恐れて、家の戸にカギをかけて潜んでいました。そこに、十字架の上で死んだはずのイエスが復活して現れ、弟子たちを励ました、というのです。でも、トマスはその場にいませんでしたので、「イエスが復活した」と弟子仲間から聞いても、信じることができません。しかし、その後、トマスが他の弟子たちと一緒にいる時に、イエスは再び現れました。その時、トマスは、自分で実際にイエスの姿を見て体に触ることができました。そうして、イエスの復活を信じたのです。それに対して、イエスは、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」と言ったのでした。

聖書のこの箇所には、少なくとも二つ、問いが存在しています。一つは、イエスの復活とはどういうことなのか、という問いです。もう一つは、「<信じる>とはどのようなことなのか」という問いです。今日は、この二つの問いのうち、2番目の問い、つまり、「<信じる>とはどのようなことなのか」、という問いについて考えてみましょう。

宮城学院はキリスト教学校です。理事長、学院長、学長、校長などに対しては、キリスト者であることを資格要件としています。一般の教職員に対しては、「キリスト教に基づく教育に理解があ

ること」を要請しています。「理解がある」とは、どういうことでしょうか。キリスト教のあれやこれやについての知識を持ってほしい、ということではありません。「キリスト教に基づく教育に理解があること」を宮城学院が教職員に要請しているのは、次のような問いを持ちつつ働くことだ、と私は思っています。——宮城学院がキリスト教学校であるということはどういうことなのか。そもそもどのような歴史的経緯を経てそうなったのか。現代社会の中でどのような意味があるのか。そして、自分はなぜ、そのような教育機関の中で働いているのか。また、どのように働くべきなのか。——そのような問いとともに働くことが、自らが選んだ職場で働く、自立した、誇りを持った人間には課せられているのではないのでしょうか。そして、その中で、キリスト教を信じるとはどういうことなのか、という問がおのずと生まれてくるでしょう。

わたし達はふつう、「1+1 は2だと信じる」とか「仙台は東京よりも北にあると信じる」とかいう言い方はしません。話し手にとっても聞き手にとっても当たり前のこと、明らかなことに対しては、「信じる」という言い方はしないようです。「信じる」という言葉が使われる状況では、第一に、信じる人自身は、信じる対象となっているものを、「正しいに違いない、また、正しくあって欲しい」と思っています。そして第二に、「自分は正しいと思っているけれども、世間には自分と違う考えの人もいる」と認識しているのです。私たちがある宗教を「信じる」という時には、「信じない人」の存在を想定していますし、逆に「信じない」という時には、その宗教を信じる人が現に存在していることを想定しているのです。

17 世紀フランスの自然科学者であり哲学者でもあったブлез・パスカルは、次のような言葉を残しています。「もし神があるとすれば、神は無限に不可解である。なぜなら、神には部分も限界もないので、われわれと何の関係も持たないからである。したがって、われわれは、神が何であるかも、神が存在するかどうかも知ることができない。」(パンセ断章 233. 前田陽一責任編集『世界の名著 24 パスカル』中央公論社 1966 年)

私たちが、神様を「信じる」とか「信じられない」とか言っているのは、まさに、神様が「存在するかどうかも知ることができない」からなのです。

しかし、世の中には見える神様が存在するではないか、と言う人もいるでしょう。実際、多くの仏教寺院には本尊の仏像が安置されており、多くの人がそれを拜んでいます。あるいは、近くの農村地帯を歩きますと、あちこちに小さな神社があります。その中には、時々、石や木でできた大きな男根(男の性器ですね)、それを祀っている社があります。おそらく子孫繁栄を願っているのでしょう。それは素朴で微笑ましい信仰です。しかし、キリスト教は、その前身であるユダヤ教の歴史の中で既に、人間が作ったものを神様として拜むこと、偶像礼拝を拒否したのです。

旧約聖書の中の「出エジプト記」(32 章)の中に、次のような話があります。エジプトで奴隷状態にあったイスラエル人たちは、モーセという指導者に率いられてエジプトを脱出し、豊かな土地を目指してシナイ半島の荒野をさ迷い歩きます。あるとき、モーセは 神様に祈るために一人でシナイ山に登ったのですが、なかなか戻ってきません。残された人々は、リーダーがいらない心細さから、何かに頼りたくなります。そこで、自分たちが身に着けていた金の耳輪を集めて溶かし、鋳物で若い牡牛の像を作り、それを神様として拝んだのです。山から戻ってきたモーセは激しく怒って、「彼らが造った若い牡牛の像をとって火で焼き、それを粉々に砕いて水の上にもぎ散らし、イスラエルの人々に飲ませた」(32:20)というのです。モーセの怒りがどれほど大きいものだったか、想

像できますね。この出来事からも分かるように、ユダヤ教＝キリスト教の神は、人間が作ったもの、すなわち偶像ではないのです。

では、このように、人間が造ったものではない神様、見えない神様を信じるとは、どういうことなのでしょう。先ほど述べたように、パスカルは「神が何であるかも、神が存在するかどうかも知ることができない」とさえ言っているのです。

しかし、科学の進歩は、私たちが見たり聞いたりできないからといって、それが存在しないわけではない、ということを明らかにしてきつつあります。よく知られているように、こうもりは自らが発する超音波によって、自らの空間的位置を瞬時に定め、暗闇の中を軽やかに飛んでいます。モンシロチョウの雄と雌は、われわれの目には同じように白いチョウチョに見えますが、モンシロチョウにとっては雄と雌は全く違って見えるのだ、とのことです。人間には見えない世界、聞こえない世界が、我々が認識できる世界の外に、豊かに広がっているのです。

聖書を開きますと、イエスが伝道を始めてすぐに、漁師を弟子にした話が出てきます。ガリラヤ湖で網を打っている漁師の兄弟にイエスが「私に付いてきなさい。人間をとる漁師にしよう」と言ったら、「二人はすぐに網を捨てて従った」というのです(たとえば、マルコ 1:16-18)。これがどのくらい史実を反映したものか、私は知りませんが、当時の社会状況とイエスのカリスマ性を考えれば、このエピソードの元となった事実が存在した、と考えることは、それほど無理なことではありません。

しかし、私たちは今、自分の目で神様を見ることができません。声を聞くこともできません。ただ、世界の歴史を彩ったさまざまな出来事を知る時、また、その中で生きたさまざまな人の生きざまを知る時、私たちは、確かに、生身の人間の力を超えたものの存在を感じることがあります。神様の力が働いていると感じることもあるでしょう。

宮城学院で働く皆さんの中には、キリスト者の家庭に生まれ育ち、あまり悩むことなくキリスト者になった人もいるでしょう。キリスト者の家庭に生まれ育ったけれども、キリスト者になることをためらっている人もいるかもしれません。また、日本社会で生まれ育った人の大多数は、これまで、キリスト教とは縁の薄い生活をしてきたことでしょう。しかし、皆さんは現在、自らの意思で、キリスト教学校の教職員となっている人間です。自立した人間・考えることのできる人間としての誇りをかけて、キリスト教と知的な格闘・精神的な格闘をしていただきたい、——私はそう思います。

見えない神を信じるとは、どういうことでしょうか。アメリカ人宣教師・ピアソンの伝記(小池創造『田舎伝道者：ピアソン宣教師夫妻』日本基督教会北見教会ピアソン文庫,1967年)を読みますと、今から100年以上前、北海道十勝監獄でピアソン自身が行った説教のことが書かれています。ある日、600名を超える囚人に対して午前と午後に説教をしたところ、420名もの囚人が悔い改めてクリスチャンになった、というのです(p.61)。その事実——、監獄という極限状況にいる人が、外国人宣教師から「あなたの罪は赦される」という言葉を聞いただけで直ちにクリスチャンとなった、という出来事——その出来事を、私は一概には否定しません。しかし、私の話を聴いている皆さん自身は、監獄の中にいるわけではありません。ガリラヤ湖の無学な漁師でもありません。そのような人が、牧師や宣教師の話を聴いて、あるいは私のような一信徒の話を聴いて、一日で劇的にキリスト者になる、ということ、私は期待していません。皆さんに繰り返し求めたいのは、自立した人間・考えることのできる人間としての誇りをかけて、キリスト教と知的な格闘・精神的な格闘

をしていただきたい、ということです。

祈祷

万物の創り主なる私たちの神様。

私たちは宮城学院の教職員として、どのような関係をあなたと結ぶべきなのか、
——トマスの行為を手掛かりに、ひととき考えてきました。

われわれは、考えることのできる存在であると同時に、
認知的な限界を持つ生物として

どのような関係をあなたと結ぶことができるのか、これからも模索してまいります。

どうか主よ、そのような我々に、知恵と力をお与えください。

この足らざる祈り、主イエスキリストの御名を通して、御前にお捧げ致します。

アーメン。